

風の末裔シリーズ 7th シーズンの8
～かるかやの原～



放牧地は、いつもと変わらず、のどかな風がそよそよと、春草の匂いを運んで来る。

リリはちょっとホツとして、柔らかな黄緑の土手を登った。この向こうに行ってしまうえば、居留地の喧騒から身を隠せる。今日はちよっと、あちら側にいたくなかった。

伸び始めた春草原のなかばに、板壁の干し草小屋がある。時間を潰すにはもってこいだ。リリは足早に、小屋からはみ出した干し草の山に、近寄った。

牧夫達は午前で仕事舞いにしたのでろう。去年の越冬草が、引っ張り出されほぐされて、冬の間にため込んだこおばしい香りを放っている。

「コッソ、と、爪先に何かぶつかった。」

干し草用の三本ホックだ。

こんな所に転がして置いて、危ないな。リリは何気に拾い上げ、草山に足を掛けて、てっぺんに突き刺さうとした。

「!!!」

寸での所で、止める事が出来た。

干し草の中に、ヒトがいたのだ。

半分埋もれて、仰向けで…最初、眠っているのかと思った。

だって、いきなり三本ホックを振り上げた娘が現れて、突き立てられそうになったのに、その青年は、微動だにしないのだ。

その者が目を開いているのを見て、リリは次に恐ろしい事態を想定して、背筋が凍った。しかし、幸い彼は生ある者で、ゆっくり口を開いて言葉を発した。

「…おどろいた…」

他人事のような、棒読みの声だった。

「お、おどろいたんなら、逃げるなり防ぐなり、しなさいよ！突き刺す所だったじゃないっ」

あわあわする娘を尻目に、青年は、のんびりゆっくり起き上がった。

「・・・が・・・って・・・に来てくれたと思ったのに・・・」

口の中で「ニョニョ」言ったので、ほとんど聞き取れなかった。

「は？何が、ですって？」

「いぢ…」

青年は、質問には答えず、藁の中に座り直して、リリを凝視した。

光彩だけが明るい緑の、黒目がちな瞳。年の頃はユウジーンよちよっと下ぐらいたろつが、口の両端が丸まって、妙に幼



く見える。藁にまみれたボサボサ髪は白濁した濃緑で、蒼の一族には、いない色だ。

「あ、貴方、風波(かぜなみの)の……」

リリは妙に下ギマギしながら聞いた。

「うん、まあ……」

「風波のお客様方は、今、広場に集まっておられますよ。歓迎の食事会だとか」

「そう……」

「案内しますっ」

「ごうや」

気だるそうに言うのと、青年は、もう一度干し草に寝転んでしまった。

「その食事会とやらに、君の部落の乙女たちが、わざとらしく、割って入って来るんだろ？ 長殿の命令で仕方なく」

「……」

「苦手、そうなの」

少し間があって、リリがふいと放牧地の奥を差した。

「本格的にバックしていたのなら、あちらの水車小屋の方がいいですよ。ここは誰か来るかもしれないし、さっきみたいに采けていたら、次は串刺しになるかもですよ」

青年は黙って身を起こし、ふらりと立ち上がった。

言ったことに従うのか、と思いきや、真っ直ぐリリの正面に来て、男女のマナーとして許されるのか？ って、ギリギリの距離まで詰めて来た。

怒ってる？ 今の冗談は、風波では通じないものだったのかしら。そういえば、閉鎖的であり外と交わらない部族だって、父様が言っていた。

「僕はシィシス」

青年が唐突に自己紹介したので、リリはびっくりして、飛び上がった。

「あ、あたしは、リリ……」

「リリ？ リリってなの？」

青年の深い海みたいな瞳が、これ以上ない程に見開いた。

「まだ成人していないから、正式な名前じゃ……」

あっと思ふ間もなく、彼の腕が、リリの細い腕を捉えて、指を絡めて来た。

「やっぱり……そうなのか」

「な、何よ！ 離して！」

「僕たちは、二つに割れた林檎なんだ」

「え？ は？ ……はあ？」

「天空で二つに割れて、地上に落ちこちた林檎。だから、こんな、ピツタリ合わせる」

青年は、呆気に取られるリリには無頓着に、繋いだ手を更に取り寄せた。

蒼の里の馬繋ぎ場には、今日は毛色の違った馬達が繋がれている。草の馬と同じように首と脚の長い異形の馬だが、こちらは草ではなく、全身鈍(にび)色の鱗におおわれていた。

少し離れた集会所の広場に絨毯が敷かれ、宴席が設えられている。

旅装を解いた若い男性が十数人、キョロキョロと落ち着かない感じで席に付いていた。皆、北方系の顔立ちで、髪や目の色は、蒼の一族に比べて碧(みどり)がかっている。

坂の上の執務室では、今年修練所を卒業したばかりの見習いの少年が、そわそわと、窓から下の広場を眺めていた。

坂を登って、執務室の統括者のホルズがやって来る。

「ほおい、ご苦労さん。交代してやるから、厨房の方でご馳走のお相伴に預かってこい。お前の好きな黒糖蜜入りの揚げ団子もあるぞ」

「はい。…あの、僕も、あそこに、ちょっと参加して来ても、

いいんですよね？」

「ん？」

「だって、『交流会』でしょ？ 同級のビルカなんか、給仕で呼ばれたって朝から大騒ぎで、髪の毛をウサギみたいに結っちゃってさ。僕も、竜使いの術を持つ風波かざなの一族の方々と、お話がしたいです」

「ああ〜〜」

ホルズが、困った感じで額に手を当てた。

「お前、『交流会』って言葉、真に受けていたのか」

「えっ？」

「あのな、それ、表向き。これって、そんな爽(さわ)やかなモンじゃないぞ」

「っっっ」

宴席より少し離れたテーブル席に、蒼の里の長ナーガと、ホルズの父で前長のノスリが、斜向かいで座っていた。

「こんなもので良かったんでしょうかね」

「まあ、いいんじゃないか？ ナーガは、あまり乗り気でなかったんだろ？」

二人は、小鳥のように軽やかに宴席の世話をする娘たちを、複雑に眺めながら、盃を傾けた。

「風波の一族は、風の民の最も古い分派の一つ。申し入れは筋が通っていましたが、断る理由もありませんでしたから…ね」
「まあ、俺達に出来るのは、文字通りお膳立てだけだ。あとは……まあ、な…」

二人がひそひそ話している所に、客人の中で一人年配の、鉤かき型に曲がった髭を蓄えた男性が、酒瓶を差し出しながら、寄って来た。

「蒼の長殿、感謝の一献(いっこん)を差し上げつかまつる」

若者達を引率して来た、世話役の男性だ。

「いえ、この度は、遠路遙々…」

長い口上の返盃の仕合いが始まってしまった。

「しかし、若者同士だけというのは、やはり心許ないのでは？ 私は、娘達の親御殿と、直接お話したかったですな。その方が、話が早く進むでしょう」

「蒼の里では、若い者達に、時間を掛けて、自分で相手を見付けさせるのです。子供の直感力に勝るものはありませんから。大人が出張るのは、その後です」

「そういう物ですかね」

イマイチ不服そうな鉤髭(かきびげ)の男性は、ナーガの前に座り、自分が今回の段取りを如何に苦勞して進めて来たのかを、

語り始めた。

社交辞令の苦手なナーガを気の毒に思いながら、ノスリは遠目に、今回の招集に快く集まってくれた娘達を、感謝の気持ちで眺めた。水差しを持ったホルズの末娘のピルカが、自分を見止めてウインクをした。

「は？ お見合い？ あれって、集団お見合いなんですか？」

執務室の少年は、もう一度、窓から宴席を見直した。

ホルズも肩を並べて、窓辺に立つ。

「ぶっちゃけて言うと、風波の男連中が、蒼の里に、女の子を漁(あさ)りに来てんだ」
「うへえっ」

「うへえ、だろ？ ナーガも最初、渋ったんだがな」

「そりゃそうでしょう。ええーっ、ええーっ、高貴な一族って聞いて、憧れていたのに」

ホルズは肩をすくめた。

「高貴過ぎて、長年、純血を守り過ぎたんだ。おかげで近年、さっぱり子供が生まれなくなったとか。さすがにヤバイと思いついて、ここ十年かは、他所の血を入れるようにしていたらしい。が、しかし、今度は、血が薄まって、貴重な太古の術の継承が危うくなって来たんだと。それで、同じ風の術を使う系

統であまり交流のなかった蒼の里に、打診して来たんだ」

「はあ…」

「風波(かざな)に伝わる毒使いの能力は、確かにお前さんが憧れるような、唯一無二な代物だ。あれはやっぱり、守らなきゃならんだろっからな」

「はい…」

「まあ、血が濃くなりすぎる問題は、蒼の里だって多少は抱えている。次回はこちらの男性陣がこちらに訪問する事になっているのだが…・・ああ、お前、行くか?」

「えっ? いいんですか?」

「いいぞ。ただし、多分、お前一人だぞ。誰も行きたがらんだらっからな」

「な、なんでです?」

「いろいろ怖い想像をして、少年は青くなった。

「あちらに行ったら、こんな交流会なんて無い。決められた女の子が待っていて、お前が拒否しなければ、その日に即祝言だ」

「ひえい」

「そっつう習慣の所だ。行くか? 行くんなら、今話しておいてやるぞ」

「いえっ、いえいえいえっー」

少年は泡喰って、頭をぶんぶん振った。

「なんだ、面白くなりそうだったのに」

「面白いだけで僕の人生を決めちゃわないで下さい。拒否出来るっていつても、実際その場に立ったら、そんな気の毒な事、言える訳ないじゃないですか。その…女性も、術の継承の為に、能力に合わせて縁談を組むって事ですか?」

「いや」

ホルズは少し、声のトーンを落とした。

「風波の能力は、男性にしか継承しない」

「………」

「だから、あの部族の女性に対する色々は…蒼の里とは、随分、違う」

少年は口を結んで、改めて広場に目をやった。食事が一段落し、女の子たちが自己紹介らしき事をしている。

「僕が…もし、蒼の里の女の子だったら、女性の扱いがそっつう部族に嫁ぐのは…あまり積極的になれないです」

「確かにな。今回カップルなんて成立しやしないだろう。しかし、蒼の里の女の子達が、頭数合わせて集められただけですって態度を取ったら、身も蓋もないだろう? だからピルカにも、皆を先導して明るく振る舞えって、言ってるんだ。見せかけ

だけでも盛り上げとかんと、気の毒だらう？ 風波の若い連中が、せつかく遠路運々来てくれたのに」

「……」

少年は、がっかりした息を吐き、窓から目をそらせた。

なんだかなあ…。竜って聞いただけで心躍らせていた自分が、気恥ずかしくなった。

そういえばナーガ様も、朝から浮かない顔をしていたっけ。

と、反対側の放牧地から、誰かが坂を登って来るのが見えた。

よく見ると、馬を曳いている。居留地の往来には、馬を使わない規則になっているのに、どうしたんだらう？

少年は目を凝らした。馬は、何か荷物を積んでいる。そして、馬の横を歩く二人は、少年のよく知った人物だった。

交流会広場では、女の子たちの努力の甲斐あって、かなりのイイ感じになっていた。

行儀良く座っていた若者たちはそれなりにほどけて、グループに分かれて談笑している。例のホルズの末娘が、陰ながら号令を取って、いろいろ気配りしているようだ。

「おお、あいつ等に、あのような振る舞いが出来るとは。ほうほう、なるほどこれが、時間をかけて相手を見つけるという奴

ですか」

最初は不満気だった風波の世話役の男性も、上機嫌になっていた。

ナーガ長は、盃の返杯をしつつ、彼の肩越しに、ノスリに目で感謝を示した。こういう場面で、ノスリ家の女性陣は百本の剣よりも頼りになる。

「うぬ？」

男性が、髭をしごきながら立ち上がった。

「あ奴がおらぬ」

「どうされました？」

ナーガの問いには答えず、男性は慌てた感じで席を離れて、談笑しているグループの一つに声をかけた。

「ハイムダル」

明るい髪色の若者が振り向いて、男性の方へ駆け寄った。

「父上、何でしょう？」

「奴はどこだ？ 『海竜使』の」

聞かれて若者は、今気付いたように、周囲を見回した。

「ああ、そういえば、いないですね」

「気付かなかったのか」

「はあ、すみません。でもあいつ、乗り気でなかったし…僕の顔を立って、同行してくれたようなものだったから、うるさく

言うのも気が引けて」

「あ奴がおらぬのでは、何もかも骨折り損ではないか。儂の苦労を分かっておらぬのか。探して来るのだ」

「え、ええ〜」

若者は嫌そうに、肩越しに後ろを見た。

さっきまでお喋りしていた女の子が、こちらを見て、待ってかれている。

ナーガとノスリが、席を立て近寄って来た。

「どなたか迷子なら、部落の若い者に探しに行かせまじょうか？ お客人には、ゆっくりして頂きたいです」

「いや、はあ、面目ない」

世話役の男性は汗を拭きながら、頭を振った。

「白状しますと、今日の交流会は、あ奴をおびき出す口実のような物です」

「父上、それを言っちゃ、他の者が立つ瀬無いですよ」

「どうやら、ヘイムダルと呼ばれる息子の方が、父よりも常識人なようだ。」

「いや、もう、まだるっこしい事は言っていられない。蒼の長殿、是非ともに、娘を世話して頂きたい者がおるのです。健やかで多産系の娘を、スバンと。天下の蒼の長殿の仲介とあらば、

あ奴も断れまい」

無茶を迫られて困っているナーガを尻目に、ノスリがそっと、ヘイムダルにすり寄った。

『あ奴』って何だ？』

「風波の中でも、術の力が桁違いにすば抜けた、『海竜使い』って系統があるんです。貴重な能力なのに、子孫が途絶えて、今、一人しかいない」

「ほお、そいつは大変だな」

「なのにその一人が、妻をめとる気が全然無い。父が躍りになるのも仕方がないのです、失礼は勘弁してやって下さい」

「ああ、まあ…」

「こちらは適当に受け流そうと思っていた交流会だけれど、どうやら先方さんには、切羽詰まった目論見があったようだ。」

さてどうした物か…と、顔を上げたノスリの目に、執務室から馬を曳いて下りて来る、見習いの少年が映った。

「おおい」

「あっ、ノスリ様」

少年は馬を係りに託し、息せきぎって駆けて来た。

「今、呼ぼうと思っていた所だ。用事を頼まれてくれるか。客

人が一人、迷子なのだ」

「それって、シィシスさんですよ？　今、執務室にいらっしやいます」

ノスリはホツとしたが、ヘイムダルは雷に打たれたような表情になった。

「奴の名は、シルフィスキスカだ！」

世話役の父親の方が叫んだ。

「風波の男の名は、父から受け継ぐ大切な物。違えてはならぬ。

だがそうか、見つかったか、良かった。早速、ここへ…」

「いえ」

少年は堅い表情で、ナーガの正面に立った。

「ホルズ様が、至急執務室に戻って欲しい、との事です」

「ㇿ?」

よく分からぬまま、広場の監督はノスリに託して、ナーガは

執務室に向かった。世話役の男性も付いて行った。

後に残ったノスリとヘイムダル。

「シィシスって、シルフィスキスカの略称か？」

「そうなのですが…」

「ん？」

「あいつがその名を、名乗る筈がないんだ…」

「ㇿ?」

坂の上の執務室。

一歩入って、ナーガ長は面喰らった。

長椅子の上に寝かされた、風波かざなの青年。意識が無いようで、ぐったりと手足を投げ出し、口の端が切れ、顔の上半分は濡れ手拭いで覆われている。

その横に、俯うつむいて表情の分からないリリ。

口を真一文字に結んだ、ユウジーン。

「シルフィスキスカ!!」

男性が室内に駆け入った。

「これはどういった事だ?! 何故このような怪我を！」

「何故は、こちらが聞きたいです！」

いつもは礼儀正しいユウジーンが声を荒げて、ナーガは驚いたが、その次の言葉は、それどころじゃなかった。

「何でそんな奴を連れて来た?! そいつ、嫌がるリリに、無理矢理抱き付いていたんだ!!」

入口で固まっていた少年は、大机の向こうのホルズが、自分に目配せしているのが分かった。少年は素直に退室した。

外に出ると、下の広場で、交流会が続いているのが見えた。

あんなに楽しそうなのに、すべてがおじゃんになるかもしれない。何とも悲しい、不安な気持ちに、押し潰されそうだった。

部屋の中では、凍り付いていたナーガが、やっと声を出した。

「それで、客人に、暴力を振るったのですか。ユウジーン」

「……!!」

「ユウジーンは手を出していません」

俯いたままのリリが言った。

「あたしを助けようと、割って入ってくれただけ。そしたら、

このヒトが三本ホックに蹴つまずいて、頭から板壁に突っ込んで

じゃって…」

「ええっ!」

鉤髭(かぎひげ)男性が、心配そうに青年を覗き込んだ。

「一応、医師に見せに行ったださ。脳震盪を起こしたただけだと。

それより、リリに謝罪は無いのか?」

鼻息荒いユウジーンを、リリが肘を挿んで止めた。そして、

俯いたままナーガ長に向いて、更に頭を下げた。

「あたしが隙だらけだったせいです。申し訳ありませんでした」

去年まで子供の姿をしていたリリだが、ここの所急に背が伸びて、女の子らしくなった。変化が早過ぎて、本人もちょっと

着いていけない。さすがのリリでも、こういうコトには慣れていないのだろう。しかしそれにしても、いつもの覇気がぜんぜん無くて、様子がおかしいのに、ナーガは気付いた。

「こんな事で交流会を台無しにしたら、他の風波の方々がお気の毒です。穩便に済ませて下さい、お願いします」

「あ、ああ：貴方がそう言うのなら」

言ったナーガ本人も、大机のホルズも、ホッと胸を撫で下ろした。

蒼の里の若者同士にだって、こういうた事件は多分起こっている。ただ、商家の話し合いで片の付く話で、長の所まで上がって来るような事ではない。

問題は、他所から来た客人が、やらかしちゃった事なのだ。

そうなることやっぱり、部族間レベルで、何らかのケジメを付けねばならず、ナーガとしても、頭の痛い所だったのだ。

「優しいね」

突然の声に、一同、びくと揺れた。声は足元からで、いつの間、風波の青年が緑の目を見開いていた。

「優しいのはいい事だ。だけれど時々、罪を生む」

「お前、他に言う事はないのか！」

ユウジーンが掴み掛かる前に、ナーガ長が間に立った。

「貴方の処分は、風波の長殿にお任せします。ただ、ここに居る間は、かなりの不自由をして頂きます」

それから、横で青くなつて一言も喋れない鉤髭の男性に向いて言った。

「私から風波の長殿に手紙を書きましょう。交流会は、このまま滞りなく」

「ははっ。寛大な御処置、痛み入ります」

「娘の希望ですから」

いきなり青年がガバリと身を起こし、大机に向かうナーガに飛び掛かった。一瞬の事過ぎて、誰も動けなかった。

すわ！ 部族間抗争の口火?! と、皆が蒼白になつた所で、彼が以外過ぎる言葉を吐いた。

「おとうさん!!」

「????????」

ホルズが、ナーガにすんごい疑いの目を向けた。ナーガはビツクリ眼まなごなまま、首を横にぶんぶん振った。

青年は、ナーガの正面に回って両肘をがっしり掴まえ、これでもかという距離に顔を近付けた。

「おとうさん！ 僕はこの娘(こ)を妻にしたい。お許しをください！」

「はっ」

「へ？」

「この野郎!!」

再度殴り掛かるユウジーンを、今度はホルズが羽交い締めて止めた。止めながら、おかしな事に気付いた。

一番怒って大騒ぎしそうなリリが、眼を伏せたまま、じっと突っ立っているのだ。

「シルフィスキスカ、お前、この娘さんを気に入ったというのか？ どんな女性にも興味を示さなかつたお前が」

鉤髭がおすおすと進み出て、今度は彼がガバリと、ナーガにひれ伏した。

「これこそ、申されていた『子供の直感力』！ お願い致す！どうか娘御の縁談をお考えください」

「.....」

ホルズが、シタバタするユウジーンを羽交い締めたまま、眉を八の字にしてナーガを見た。彼にしたら、この男性の気持ちに、すんごい親近感を覚えるのだ。

ナーガも同じく八の字眉だ。大昔ホルズに、こういう心配を

すんごくかけまくっていた覚えがあるのだ。

だから二人とも、怒る気持ちになれないで、ただただ困るばかりだった。

「リリを気に入るとはなかなかの度胸・・・じゃなくて、見る目があるが、残念ながら、その娘には婚約者がいる」

やっぱり言うつホルズに、青年は、ナーガの顔を見据えたまま、ケロリと返事をした。

「大丈夫！ 僕はぜんぜん気にしません。婚約なんか解消すりゃいい」

ユウジーンはホルズの腕を逃れて、リリを庇うように立ちはだかった。彼の若い脳は、ナーガやホルズより回線が少ない分いち早く、青年に対して、『こいつヤバイ奴認定』をしていた。

「あ……」

ナーガが何とか声を発した。

「えーと、リリ。貴方、どうなんです？ この彼といつの間に関知り合ったのです？ フロポーズされるような間柄なのですか？」

ナーガもホルズもユウジーンも、彼女がいつもの調子で、へそなんなんじゃないわよ！ あんたなに考えてんの！と、一蹴するのを待ち構えていた。

しかし驚くべき事に、顔を上げた彼女は、まことに複雑な表情で、口の中でもゴモゴ言葉をはねるばかりなのだ。

「…そんな事、急に、言われ、たつて…」

「ここで三人は、この娘も一応やっぱり女の子だった事を思い出した。そういえば、過去にフロポーズされたついても、へ売れ残ったら貰ってやる…だったんだよな…」

そのすんこい失礼な言葉の張本人が、イフつき気味に彼女を振り向いた。

「なにその辺の小娘みたいに赤くなってんだよ。リリは長娘だろ。長を継ぐんだから、他所に輿入れとか、あり得ないだろ？」

風波の青年が、ナーガの前から消えた。

いや、トンでもない早さで、ユウジーンとリリの間移動したのだ。飛び込んだ瞬間、ユウジーンの胸ぐらを掴んでいた。

「この娘(こ)を、縛るな……」

「お、お前、何様のつもりだ！」

一触即発の所を、リリが腕にしがみついて止めた。だが何故か、しがみついたのは風波の青年の腕だった。

ナーガとホルズは、なんだか呆気に取られて眺めていた。

なんとというか、ユウジーンには申し訳ないのだが、風波の青

年の方が、模範的な恋物語のヒーローみたいなのだ。

世話役の男性はというと、リリが顔を上げた時から、目を真ん丸に見開いて、口をパクパクさせている。

その時、外から、見習いの少年の悲鳴が聞こえた。

同時に、室内が暗くなった。

窓の外を黒い影が覆ったと思ったら、次の瞬間、ぶわっと風圧が来た。室内の物が飛ばされ、青年とリリが消えた。

一同、外に飛び出ると、執務室の屋根にとべろを巻くように、鈍(にび)色の巨大な竜。

「ば、馬鹿な！ 蒼の里は結界が効いている筈。あんなモノが入って来られる訳が…」

ユウジーンが呻いた。

「僕の海竜には、結界は、無意味」

いつの間に、竜の背に、リリを抱きかかえた青年。

「この娘(こ)を、拐(さら)おう」

「シルフィススカ!!」

遅れて飛び出した、鉤髭の男性が叫んだ。

「その娘はリリヤではない。確かに驚くほど似ているが、リリヤではないのだぞ!」

「:リリヤだよ」

一言残して、旋風を起こして、二人を乗せた竜は消えた。

竜の去った後の執務室デッキの中央で、ナーガが、二本指を振り上げた形で、止まっていた。

「ナーガ?」

「あ、ああ…」

ホルズに声を掛けられて、彼は我に返って、腕を降ろした。風を孕んでいた長い髪が、ふざりと肩に降りた。

「リリだけでも引き戻そうとしたのですがね」

「ああ、お前なら、イケただろ? 何で術を途中で止めちまったんだ?」

「リリに、目で止められました」

「リリが、か?」

「追い掛ける!」

ユウジーンが鼻息荒く、既に走り掛けた。

「待て、まあ、待て」

ホルズがその肩を掴まえた。

「草の馬じゃ、あれに追い付けん。そうだよな、ナーガ」

「はい、風波の召喚竜…、私も見るのは初めてでしたが、いや

はや、華麗なものですねえ」

「なにを呑気に感心してゐるんですか！ あのイカし野郎、リリに何するか、分かったもんじゃありません」

地団駄踏むコウジンの顔を、ナーガ長は、正面から覗き込んで、諭すように、ゆっくりと言った。

「大・丈・夫・です」

「で、でも」

「リリは、危険なものは、ちゃんと嗅ぎ分けが出来ます。あの子を信用してあげて下さい」

「ナーガ様は、リリの事、かいかぶり過ぎです。あいつ、人生初めての事態に、免疫無くてのぼせあがってるだけだって！」

後ろでホルズが吹き出して、コウジンに睨まれた。

「まあまあ。いざという時、お前には一番に動いて貰わねばならないから、待機だ、待機」

「……」

コウジンはしぶしぶ追い掛けるのを諦めたが、今度は、へたり込んだままの、世話役の男性に迫った。

「リリヤって何なんだ？ あいつの初恋の女性に瓜二つなんて、ふざけたオチじゃないだろうな！」

「はあ、いや、まあ……」

「舐めてんのか！」

「父上！」

明るい髪色の青年が、坂を駆け登って来た。男性の息子の、ハイムダルだ。

「何があったのです？ あれはシルフィスの海電ですよ。いつにも増して大きかったけれど……今度は一体何を言って、あいつを怒らせたんです？」

父を助け起こしたあと、慌ててナーガ長の前に立って、青年は深々と頭を下げた。

「シルフィスキスカの傍若(ほうじゃく)、まことに申し訳ありませんでした。あいつに勝手をさせていた僕の責任でもありません。どうか、お許しください」

「ああ、……はい」

父親よりこの息子の方が、よっぽど世話役に向いているなあと思いつながら、ナーガはホルズに目配せして、事態の收拾にあたる事にした。

下の交流会場では、突然、坂上の執務室の屋根に現れた電に、騒然となった。

ハイムダルが、あれは無害な海電だと説明して、蒼の里の者は落ち着きを取り戻したが、事情が分からないままでは、交流

会どころではない。

今、ホルズが下りて行って、ノスリと共に、そちらの世話に当たっている。

執務室には、ナーガとユウジーン、世話役の男性、その息子のハイムダルの四人。外のデッキには、見習いの少年が、連絡役として待機している。

「俺が外から帰って来た時、放牧地の干し草小屋の前に、二人を見たんです」

立ったままのユウジーンが、最初から説明を始めた。

「リリが手をブンブン振り回して嫌がっているのに、あいつ、両腕ガッチリ背中にして、抱き付いて。だから急降下して、馬から飛び降りて割って入ったんだ」

「それで、彼は壁にぶつかって、気絶したと」

「はい」

ナーガは、ともかく、仏頂面のユウジーンを座らせた。

「その後のリリは、何か話をしましたか?」

「いえ、ずっと黙って、俯うつむいて」

「うーん…」

「おかしいですか?」

「おかしいでしょ?」 リリが『本気で嫌がった』のなら、あ

の彼は、あんなケガじゃ済まなかった筈ですよ」

ユウジーンは、しゃっくりしたみたいな顔になったが、すぐに気を取り直した。

「そりゃ…、きっと、シヨックだったんですよ。蒼の里には、リリにあんな真似出来る奴なんか、いないんだから」

そして、今一度、ギロリと、風波の親子を睨んだ。

しかしハイムダルは、茫然と虚空を見つめている。

「父上、その、蒼の長様の娘さんは、そんなにリィリヤに似ていたのですか?」

「あ、ああ。髪と目の色は違うが、顔も姿も瓜二つだった」

「…そうか………」

「だから、その、リィリヤって女性を、ここへ連れて来いよ! 瓜二つだろうがヘチマだろうが、こっちは知ったこっちゃ…?」

青年が、両の目を震わせて涙を溢したので、怒っていたユウジーンは、面喰らった。

「お、おい、なんだ?」

「ああ…」

ハイムダルは涙を拭って、顔を上げた。

「ずっと…女性に対しても、誰に対しても、感情を表に出さな

かったあいつが…」

「はあああ?!」

さっきの彼のハイテンションを、巻き戻して見せてやりたくなった。

「…たくもっ! 風波の頭(おつむ)は、俺たちとは随分造りが違うみたいだなっ」

「い…幾ら何でもその言われようは…」

言い返そうとする父親の口を横から塞いで、ハイムダルは、真剣な表情で話し始めた。

「僕はシルフィスキスカの幼馴染みです。小さい時から知っている。真面目で、責任感が強くて、誰よりも周囲を気遣う、思いやりのある奴でした」

何か言いたそうなユウシーンは、ナーガが制した。

「僕達の隣には、いつもリリヤがいた。花がこぼれるように笑う娘だった。シルフィスは彼女を、魂を分かつ程に愛していた。だけれど、彼女が生まきている間に、一度も抱きしめる事はなかった」

「……………」

「彼は、抱き付いていたんじゃない。…思わず抱きしめていたんだ…」

「そ、そうか…あ…そりゃ、色々毒なのは分かったよ。

だからって、顔が似ているだけで、いきなり抱き付いたり拗つたりは無しだろ? リリは物じゃないんだ」

ユウシーンの勢いは少し和らいだが、やはり、許せないのは変わらない。ハイムダルは、肩を落として息を吐いた。

「そうですね…。貴方がたからしたら、そうですね。それが普通ですよね…」

「ああ、それでか!」

黙って考え込んでいたナーガが、ボンと掌を打った。

「何がですか? ナーガ様」

「リリの様子がおかしかった理由ですよ」

ナーガは、何だかホツとした様子で、大机の席に着いて指を組んだ。

「あの子が、触れた手紙から書いたヒトの心を読み取れるのは、知っているでしょう?」

「は、はい…」

「抱きしめられた腕から、肌から、受け取ってしまったのです。

あの不器用な若者の、内面に封じられた強烈な想いを。酔う程にあてられて、酩酊状態だったのですよ」

ジェット気流には慣れているリリだが、さっきからクワクワして目が眩みそうだ。こんなこと初めて。

この黒い竜は、彼女の知る高空飛行とは、ぜんぜん別の飛び方をしている。彼女の若紫だつて相当早い筈なのだが、悔しいけれど、パワーが桁違いだ。

「逃げないんだね…」

後ろからピッタリ彼女を抱える、青年の声。

「逃げた方がよかったの？」

「君が逃がれたいと思つたら、いつでも逃げる事が出来る。僕は追い掛けない。何をしても、君の自由」

「無責任ね、こんな空の上に連れて来ておいて」

こんなおかしな奴のいいなりになっているのも、初めて。いつもの自分なら、とっくに怒鳴りつけて吹っ飛ばしている。だけれどこのヒトに対しては、ちっとも怒りが湧いて来ない。どうしてしまったんだろう？ 何だか自分じゃないみたい…。

無数のジェット気流の帯を突き抜けて、竜は更に上昇し、やがて、星もまたたかない紺碧の空間に、躍り出ぬ。

「……」

「……」

「…うん、ちよっと」

青年は、自分のマントを外して、娘の細い肩をくるんだ。

「少し待ってね」

「…？」

「僕の…僕らだけの、秘密の場所が、もうすぐ、来る」

「では、しかし、蒼の長殿！」

鉤髭の男性が、変な前置詞の言葉を発した。

「今一度、娘御の縁談を考えては頂けないだろうか。我が部族にとつて、海竜使いの血統は、全ての根幹、主流なのです。絶対に絶やせない。あの能力が途切れると、近い将来、全ての竜使いの術は滅んでしまふ。あ奴がどういう理由であれ、妻をめとる気になったのは、千載一遇なのです」

彼にとつての最優先がそれなのは、よく分かるが、ちよっとは空気を讀みながら「リリ押せばいいのに…」。ユウジーンも、もう怒る気力も失せて、呆れた溜め息を吐いた。

「そのリリヤって娘が生きていれば、あなたの苦勞も無かつたのにな」

「リリヤ！ いえ、あの娘はいけません。あの娘が元凶だったのです」

「…？」

ユウジーンは、ハイムダルの方を見た。

彼は、思いきり眉間に縦線を入れて、嫌そうな顔をしている。

リリは、驚愕していた。

紺碧の空に、水晶みたいな白い欠片が現れたと思ったら、みるみる近寄って、見上げるばかりの氷の塊となったのだ。

よく見ると、竜がくしゃっと丸まった形に似ている。

鈍(にび)色の竜は、その氷の竜に、絡み付くように停止した。

次の瞬間、乗って来た竜は、ノイズを放ってかき消えた。

「……」

青年はリリを抱き抱えたまま、氷山に飛び降りた。

「風波(かざな)の竜は、生き物ではない。風と空中の水分から

竜のエッセンスを集めて、その都度創りあげるんだ。それが、

風波の術」

「凄いのね……」

風波の大人たちが、竜使いの術を廃れさせたくない気持ちが、ちよっと分かった。

冷たい氷面に下ろされて、リリはふらついた。

光のまたたかないこの空間で、カットされた硝子のような地面だけが、冷たく反射している。

「これ何？」

「見ての通り氷の塊。この星のこの高さを、一定の周期で浮遊している。色んなバリエーションで釣り合って、地面に落ちこちない」

「聞いたことないわ、そんなの。自然に出来た物なの？」

「ううん、僕が作ったんだ、十年前に。もっとも、どうやって作ったか覚えていないから、もう二度と作れないけれど」

「……」

青年は、リリの手を引いて、氷面を歩いた。

不思議な事に、この塊に立つと、中心から引っ張られるようで、どこまで歩いてもそこは『地面』『側面』『底』も無かった。

目の前に、大きな氷の裂け目が現れた。

青年は、躊躇なく中へ降りる。リリも手を支えられて付いて行った。足元は、氷を削って階段に作られていた。

「ねえ、シルフィスキスカ」

「シィシスだよ。リィリヤは舌っ足らずに、いつもそう呼んでいたんだ」

「そう、…シィシス。さっき、世話役のおじさんも叫んでいたわね。その、リィリヤってヒトに、あたしが似ているの？」

「うん」



「ふうん、かわいそう。こんなへちゃむくれに似ているなんて言われて」

「姿だけじゃない。なまじヒトの心を読み取れてしまうから、気を遣い過ぎて、自分を殺しちゃう所とか、そっくす」

「……」

リリは口を結んで俯うつむいた。初対面のくせに、何なのよ、何でそんなにスバズバ言えちゃうのよ。とにかく、彼のこのペースで、自分はおかしくなっているのだ。

「それに、リイリヤはこの世の花をみんな集めたよりも、綺麗だよ。だから君も、おんなじだけ、綺麗」

「まぶか……」

「嘘だと思ったら、比べてみればいい。そこに居るから」
「……」

青年の手に、ホウと光が灯った。乱反射する氷の壁の向こうに、誰か……居る？

執務室のユウジーンは、風波の父子を、交互に見た。

「えっと？ リイリヤって、シルフィスの恋人じゃなかったの？」

「とんでもない！」

鉤髭の父が叫んだ。

「あんな、言の葉も解さぬ娘！」

ユウジーンと、それから、大机のナーガも、ピクンと揺れた。

息子のハイムダルが、慌てて口を挟む。

「ああ、驚かないで下さい。僕らの部落では、珍しい事ではないのです。ご存知の通り、部落の存続も危ぶまれる程、血が濃くなり過ぎて」

「……」

「でも父上、リイリヤは、言の葉を解さないなんて事なかった。思いやりに溢れた、優しい娘でした」

「どうだか。結局、嫁入り先でも、問題を起こしたではないか」

「ちょっと待てー！」

親子二人で話が突っ走り出したので、ユウジーンがストップをかけた。

「何で、あいつが『魂を分かつ程に愛した』リイリヤが、嫁に行った話になる？」

「そりゃ……」

男性が鉤髭をしごきながら、何でわざわざそんな事を聞く？ という顔をした。

「ぶさわしくありませんでしたから。大切な血統の持ち主が、あのような娘と間違いを起こす前に、我々大人でちゃんと話し

合って、離れた土地に嫁にやりました。シルフィスキスカが渋ったので、納得させる為に、随分と家柄の良い輿入れ先を、苦労して探したのです」

「……………」

ユウジーンも凍り付いていたが、ナーガはもっと、固い表情だった。

だが鉤髭男性は、彼らの心情に気付かぬようだ。

「骨折って、身に余る縁談を整えてやったのに、翌朝、帰されて来たのです。先方に結納金の返還を求められるわ、シルフィスキスカはおかしくなるわで、散々でした」

「彼女の言い分を聞いたのですか？ 言葉を解さなくとも、意思を伝える方法はあるでしょう？」

ナーガが思わず口出した。

「荷車に乗せられて、もの言わぬ姿で、帰されて来たんだ」

鉛を呑み込んだみたいなヘイムタルの声に、二人は言葉をなぐした。

「自分の身体にあんなに水分が詰まっていたのか？ って、びっくりした。全身の水が、目を通って、後から後から、絞り出されるみたいに」

氷の壁の前で、青年はリリを振り向いた。

「竜に乗って、ヨダカのように空を切り裂いて、ここまで昇ったんだ。それから、冷たいリリヤを抱えて、ずっと泣いていた。空も風も時間も、全ての営みが止まって、凍って行く感じがした。気が付いたら、本当に、周りが凍り付いていたんだ」

「……………」

リリは、紫の瞳を瞬きもせず、分厚い氷壁の中の、白い少女を見つめていた。睫毛は縫い合わされたように閉じられ、額には、少しの傷が見えた。

「婚礼の夜にフラフラ出歩いて、崖から落ちたとか。どこまでも愚かな娘…、あ、いや、長殿の娘御は違いますぞ。あのような娘と似ていると言われるだけでも不愉快でしょうが、だが、あれ以来、シルフィスキスカが部落に寄り付かなくなって、困っていたのです。生きた体温のある娘に出会えば、意固地も溶け出すだろうと。息子に説得させて、無理矢理引っ張って来た甲斐があったというもの」

周囲が黙ってしまつと、うしろめたい者は、それを覆い隠す為に饒舌になる。この男性も、自分が何かをしくじったという自覚はあったのだろう。『何を』しくじったのかまでは、分かっていないが。



「リィリヤの手の中に、草と土が握られていた」

氷の壁に手を沿えて、シルフィスがポツンと言った。

「崖から墜ちた時、しがみつく間があったんだ。そのときずっと、僕の名を呼んだろう。聞こうと思えば、聞こえた筈なんだ。でも僕は、耳を塞いでいた。大人達の言うように、僕は僕の血統を守り、リィリヤは、他所に嫁いだ方が幸せになれると、無理矢理、思い込もうとしていたから」

声は抑揚なく、最後の方は上ずっていた。

「最初、君に出逢った時……リィリヤが、三股の槍を持って、今度こそ、僕に罰を与えに来てくれた……と、思ったんだ」

リリの細い指が上がって、彼の肘に触れた。

「それで、貴方は、周囲に気遣う事を、やめたのね」

「……」

青年は黙っていた。

「大人達の決め事など蹴飛ばして、リィリヤを妻にしたいと思いきり、叫びたかったのね」

「……」

「誰はばかることなく、リィリヤを抱きしめたかったのね」

「……」

「リィリヤを、拐って……逃げてしまいたかったのね」

「……」

青年は俯うつむいて、小さく頷うなずいた。

「あとは、何がしたいの?」

青年は顔を上げた。

リリの紫の瞳が、真正面から彼を見つめていた。

「私の娘の事は、彼女自身が決めます。私には口出す事は出来ません」

ナーガが、ようよう言葉を発した。

抑えていても、声の震えを隠す事が出来なかった。本当は、里の娘たちとの交流も、打ち切りたい位だったが、そこは踏みとどまった。

男性は、さすがに、ナーガを不快にさせている事を自覚した。「いやいやいや、蒼の長殿、私どもに誤解があるようですが、本当にああするしかなかったのです。リィリヤが、たとえマトモな娘でも、シルフィスキスカとの婚姻は認められなかった。血が、近すぎたのです。近いも近い、この世で一番近い柄柄。双子の兄妹だったのですから」

「僕たちは、二つに割れて、地上に墜っこちた、林檎なんだ。」

だから、ほら、こんなにも呼び合って、こんなにピッタリ合わせる」

シルフィスが、リリの肘に腕を絡めて、引き寄せた。

執務室の二人は、黙ってしまった。

さっきまで、風波の部落に凄く悪印象を持っていたナーガと
コウジンだが、ちょっと悪かったかな…と思えてきた。

ナーガだって、蒼の里でそんな事があったら…困る。とにかくそれは、とても困った事なのだ。ヒトの心ばかりは、理屈ではどうしようもない。

外のテッキから、少年の呼び声があった。

コウジンが出てみると、ウサギ頭のホルズの末娘、ピルカが、小さい革靴を両手で持って、立っていた。

「これ、ハイムダルさんのかしら？ 宴席に残っていて、誰のでもないって言うから」

「あ、僕です。ありがとうございます」

ハイムダルは、慌てて横から手を出して、靴を受け取った。

「風波の他の皆さんは、お宿の方に移動しました。ハイムダルさんは？」

娘は、ちょっと渡すのを遅らせながら、聞いた。

「俺が後で案内して行くよ」

「そう…はい」

コウジンに言われて、ピルカは残念そうに、お辞儀をして去りかけた。が、意を決したように顔を上げ、風波の青年を振り向いた。

「あの…、さっきお話していた、私の自慢の刺繍。見たいって仰ってくださいたでしょう？ 後で必ず宿舎に持って行きますから、見て下さいね」

「あ、ああ…」

風波の青年は、遠慮がちにナーガを見た。

「是非、見てあげて下さい」

ナーガは、目を丸くして答えた。色んな意味で、驚いたのだ。これで終いかと思いきや、娘は、もう一度ナーガを驚かせた。

「二、三歩歩いた後、首を横に振りながら、戻って来たのだ。」

「ああ、やっぱり黙ってられない。失礼は後で罰して下さい。でも、どうしても、ひとつだけ言いたいのです」

「…？」

世話役の男性も、ハイムダルも、驚愕の表情だ。多分、彼らの部落では、女性がこんな風に割って入って、自分の考えを言うなんて、あり得ない事なのだろう。

「いいですよ」

ナーガが優しく答えたのも、彼らには驚きだった。

「あの竜が去ってから、他の風波の方々に、シルフィスさんの事、色々聞きました。それで、思ったことがあるのです。皆さんが口々に話す事を繋ぎ合わせて理解しただけだから、的はずれかもしれないけれど」

「話してください、聞きたいです」

ナーガは静かに言った。

天空の氷の竜。

さっきからシルフィスは、リリの背に両腕を回して、微動だにしない。

リリは目を閉じて、ただじっとしている。

この凍えた空間で、肌の触れた温もりだけが、現実世界に繋がる物だった。

「…ありがとうございます」

青年はボツンと言った。

「僕のがままに付き合ってくれて」

そして、腕を緩めて、少しずつほぐれぬように彼女を離した。

「君は優しいね」

「それでもないわよ」

リリは、最後に離れた指先を、もう一度、彼の指の第一関節に掛けた。

「最初ほど嫌じゃなくなっただけ」

「……………」

「さあ、次は何がしたいの？、あたしを妻にしたい？」

「……………」

「もう…いいの？」

リリの言葉はつつけんどんだったが、曇り掛ける感じではなく、ゆっくりとした呪文のようだった。

「なら、次は、あたしのわがままに付き合って」

言いながら、リリは横を向いて、少女が埋まっている氷の壁に右手を当てた。

「っ？」

口の中で何か呟くと、手の周囲に小さく風が渦巻き、氷を砕き始めた

「や、やめろー」

止めようと手を出したシルフィスは、リリが左手に作った放電に、パシリと弾かれた。

「ここに居るのは、リイリじゃないわ」

「よせー！ やめろー」

「貴方を過去に縛り付けている、ただの抜け殻」

「黙れ！ リィリヤだ！ 黙れ！」

掴みかかるシルフィスを、リリは、さらに強い衝撃で弾き飛ばした。

「抜け殻だけ愛おしんで、一歩も先に進もうとしない貴方が、長になる為に一日も欠かさず修練しているあたしに、敵うと思っっているの？」

「何でもいから、とにかくやめろ。やめてくれ、お願いだ。」

「やめてくれるわよ」

リリは、砕いた氷の穴に肩まで右腕を突っ込んで、止まっていた。少女に届く、少し手前だった。

地べたに這いつくばるシルフィスに、リリは、氷の穴から抜き出した右手を突きつけた。握ったこぶしから、ポタポタと滴が落ちていく。

呆気に取られて見つめる前で、ゆっくゆくと指を開く。濡れた掌の真ん中に、ひときれの、萎びた草。

「っ？」

「こんな雲の上の高空に、草がある訳がない。これは、リィリヤの握りしめていたという、草でしょっ？」

「っ？っ？あ、ああ…多分…」

リリは、両手で草を挟み、額に付けて集中した。

そんなに得意な術じゃない。でも、今、出来なくて、何の為のあたしなの?!

少して、娘は紫の前髪の下の目を上げた。強い、凜とした表情だった。

「ねえ、あんた、シィシス」

「……」

「竜を飛ばして頂戴」

「はっ？」

「とっどと行くわよ」

いきなり急ぎ立てられて、青年は、勢いでいいなりになっていた。

「君、ちっとも、リィリヤじゃない…」

「そうよ、今頃気付いたの？」

「風波の殿方は、皆が皆、シルフィスさんとリィリヤさんに同情し、哀しい悲恋物語として語りれるのです」

ピルカは緊張しながらも、背筋を伸ばして話し始めた。

「ああ…」

ナーガたちは頷うなずいた。自分たちだって、ハイムダル

親子に聞いて、そう思った。

「でも、私には、凄く違和感がありました」

「えっ?!」

「女の子だけになった時、確かめたんです。そしたら皆も、やっぱり変だと思っただって。どうやら、男性と女性じゃ、受け取り方が違うんじゃないかと」

「……………」

シルフィスは、リリに言われるままに、竜を飛ばしていた。

あんなにリリやと重ね合わせていた娘が、今は、ぜんぜん違う風に見えるている。しかし、それで寂しくはならず、何故だかドキドキと胸踊っていた。

「あすこだわ」

彼の前で、額に草を当てて集中していた娘が、地上の一点を指差した。

「……知っている場所だ……」

「あそこには、降りたくない」

「貴方のわがままに付き合っただけじゃない。あたし、結構な目に遭った気がするんだけど? さあ、降りて」

「……………」

青年は口を入りの字に曲げて、竜を地上に向けた。

そこは、切り立った崖の真上だった。すく近くに、リリやが輿入れした部落がある。そう、ここは…。

「来るのは初めて?」

竜の背からヒトリと飛び降りながら、リリが聞いた。

「来る訳ないだろ。今だって、目に映したくもなし」

「そうやって、目を背けているから……」

後の言葉は呑み込んで、リリは屈んで、地べたに両手を付いた。まともに来た事のない術だ。でも、今出来なければならぬ。今このヒトの為に何も出来ないのなら…、何の為の蒼の里の時期長なのさっ?!

「風波の方々は、はっきりとは言わないけれど、どうやら、リリやって女の子は、意に沿わぬ縁談に悲嘆して、身を投げたと思っっているみたいなのです」

ピルカの言葉に、男性陣は、喉をきゅっと閉められた気分になった。確かに、何となく、うっすら、そうじゃないのかなあ……って思っていた。

「トンでもないです! あり得ない!」

娘のトーンの高い声に、ナーガまでもがビクツとした。

「女性を何だと思っているの?! って、皆で憤慨しましたよ。」

そして男性は、女性が他所の土地に嫁ぐのを、へ大変だろうな、可哀想だな、とは思っけれど、決して自分がそうなる事はないと安心して臍抜けているから、そんな短絡的な考えに至るのだな、って結論になりました」

「……………」

蒼の里の男も、風波の男も、口を結んで、ウサギ娘を凝視している。

「女の子は、いつか、生まれ育った家から出て、他所に嫁ぐ。もしかしたら、友達もない遠くの土地に、独りぼっちで行くかもしれない。そうしたら、今とはぜんぜん別の自分にならなければいけない。もの心つく頃から、当たり前隣に、女の子には、そういう覚悟があるのです」

「……………」

「意に沿わぬ縁談」ときで身を投げるような、弱い生き物ではないわ」

「それは、君たち蒼の里の、自由に育った女の子だから、言えるんじゃないか？ 風波の女性は、そうじゃないと思うよ」

「ウサギのこそっとした反論に、ウサギ娘は目をつり上げた。」

「どこの女の子だって一緒です。女性が何も考えず、羊みたい

に従うだけの生き物だと思ったら、大間違いだわ。もしも本当にそうだとしたら、どんなに男が強い術を持っている部族だって、とっくの昔に滅んでる」

「……………」

「リイリヤさんは、並外れてヒトを気遣う優しい方だったって、皆が口を揃えて言っていました。そんな方が、自分の一番大切なヒトが、一番傷つくタイミングで、身投げなんかする訳ないじゃないですか。彼女に対する冒涇です」

三倍返しに雪み掛けられて、ウサギンだけでなく、その場の男性全員が、叱られた羊みたいに黙らされた。

「彼女は多分、行った先での人生を、ちゃんと頑張って生きる覚悟を持って、輿入れをした。そしてその一日目で、不幸な事故で命を落とした。それだけです。誰のせいでもありません。誰一人、負い目を背負って苦しまなくてもいい事なのです…」

娘はここで、ヘイムタルを、次にその父親を、じっと見つめた。父親は、それまでにない…子供みたいに泣きそつに顔に、一瞬だけ、なった。

ナーガは、やっと、この娘が言いたかった意味を、理解した。

「長い『ひとつだけ』でしたわ」

長の言葉に、ピル力は赤くなって、お辞儀をした。

「とても大切な『ひとつだけ』でした。ありがとうございます」

地面に両手を付けて微動だにしなかったリリが、ふいっと力を抜いた。

立ち上がった、ふわふわと崖淵に向かって歩く。

「おい、危ない!」

シルフィスが止める手を振り払って、娘は淵に膝を付いて、そこを降り始めた。

「何を、何をやっているんだ。よせ、危ないから、やめてくれ」
慌てるシルフィスに、リリは淵から顔を出して、ゆっくりと言った。

「そんなに危なくはないわ。あたし、貴方が思っている程、子供じゃないし。真上に立たれたらむしろ危ないから、横にずれて頂戴」

「下に降りたいのなら、竜を飛ばしてやる」

「下じゃないのよ」

言いながら、リリはサクサクと身体二つ分も崖を降り、少し広くなった棚に足を掛けた。

そのままそこに取り付いて、斜面に向いて屈み込む。

「ねえ」

「さっ」

「リリヤがここに来たのって、今時分の季節だったのでしょっぴ」

「…ああ」

青年の返事に、リリは無言で納得して、今度は崖を登り出した。

差し出す手の助けを借りないで、淵まで上がり着いた娘は、膝の土をパンと払って、シルフィスの正面に立った。

そして、目を上げて、彼をじっと見た。

「…っ」

夕暮れ間近の桃色の空を背景に、鼻の頭に土を付けた娘が、口の両端を上げて微笑んだ。

「はい」

差し出された指の先には、爪より小さい、星の形の白い花。

「……………」

「リリヤは、この花を採りに来たのよ。ただ運が悪くて、足場が崩れて、草を掴んだだけで、落っこちてしまった。この『地の記憶』が、教えてくれたわ。あつという間の出来事で…その…本人は、何が起ったのかも分からない程、あつという間の…」

「本当か? 出任せじゃないだろうっな」

『地の記憶』を語って嘘を口にすると、二度とその術は使えなくなる。そんなリスクを犯すくらいなら、最初から何も言わないわ」

「……」

「興入れの道で花を見付けて、後で採りに来ようと決めていたのじゃないかしら。彼女、手紙が書けないのでしょうか？ 手紙の代わりに、貴方に送ろうと」

「そんな事まで、地面が教えてくれるのか？」

「いえ、その辺は、握っていた草の切れ端から」

「……」

「貴方に花を贈りたいという気持ちだけが、匂いこだまのように、何度も何度も響いて来たわ」

「……」

シルフィスは、ただ黙って、綿毛みたいな花びらの、小さな星を見つめていた。

「あたしは、貴方たちじゃないから、何でその花なのかは分からない。でも、とにかく受け取ってあげて。彼女の、最後にやろうとした事よ」

青年は、そろそろと手を伸ばして、その花に触れた。

触れた瞬間、身体の中に、風が雪崩れ込んできた。

懐かしい、暖かな、風。

そうして、当たり前みたいに、その意味を、理解した。

空は、薄桃の時間を過ぎて、星たちが忍び寄っている。

両頬の涙にそれを映してただ立ち尽くす青年に、リリはそっと話し掛けた。

「受け取れたの？」

彼は小さく頷うなずいた。

「そう……よかったわね」

カサリと音がして、背後の繁みから何者かが出て来た。

「うわ！ 驚いた！ こんな所にヒトがいるなんて。えっと、

こんばんはっ」

シルフィスよりちょっと若いぐらいの、身なりの良い若者。

服装が身軽だから、近隣の者だろう。

「こんばんは……」

リリがそっと返事をした。

若者はホッとした顔をした。こんな女の子を伴っているんだから、不審者ではないと思ってくれたのだろう。

「うちの部落にご用ですか？」

シルフィスはムスッと黙っていた。どう考えたって、リリ

ヤを荷車に乗せて返して来た部落の者だろう。

「おかしくはないわ。夫が妻を慈しむのは、ちっともおかしくないわ」

リリが慌てて言った。

「はは…、夫と言えるかどうか」

若者は下を向いて、自嘲気味に息を吐いた。

「子供の頃の、幻みたいな出来事でした。部落が飾り立てられ、大人たちが、私の婚礼だと言う。どこか遠くから、私の妻がやって来ると。実感もないまま、大人に言われるままに、衣装を着て、儀式をしました」

「……………」

「儀式の最後に、やっと、妻になる女性に会えました。キラキラしたビーズの冠の向こうに、花がこぼれるように微笑む女の子がいた。その時初めて、現実の实感が湧いたのです。ああ、これからこのヒトと添い遂げるんだ。大切にしなきゃ。明日になったら沢山話をしよう、と」

「……………」

「でも、その夜に、彼女はいなくなりました。大人たちに聞いても、その事はもう口にするなと怒鳴られた。何年かしてから、ここで亡くなった事を教えられました」

「……………」

「明日になったら話をしようくではいけなかったのです。大切

にしたいと思った時、すぐに大切にしなければ

「……………」

「私はそれを、一生の戒めにする事にしました。今では、素晴らしい妻と子供たちに恵まれています。その戒めを守ったお陰だと思っています。だから、毎年この時期に、感謝の気持ちを彼女に伝えに来るのです」

「んじ…」

何も言えなかったリリが、やっと声を出した。

「きつと伝わるわ」

「ありがとうございます。…部落ではタブーなんです。いつもコッソリ来なきゃならなくて。通りすがりと聞いて、ついお喋りが過ぎました。すみません、辛気くさくさ話で」

「辛気くさくさ話ではない!!」

シルフィスが大声を出して、大人しそうな若者は飛び上がった。

「美しい、尊い、話だ」

青年の面目から、雫がポタポタ落ちるのを見て、若者は面喰らった。

「い、この下、感動屋なのよ。お話ありがとうございます、あたしも感動したわ。お幸せにね」

リリに言われて、若者は気恥ずかしそうにお辞儀をし、繁みに分け入って部落に戻って行った。

シルフィスは、小さい白い花を胸に当てて、しばらく目を閉じていた。

リリは黙って待ってあげた。

彼の中で、色んな整理を着けるまで。

「リリ」

「うん？」

「帰ろう」

「うん」

星夜を駆ける、鈍(にび)色の竜。

後ろのシルフィスが黙っているの、リリも暫く黙っていたが、蒼の里の灯りが見える頃に、ふわりと話しかけた。

「ねえ」

「ん？」

「あたし、貴方の事、何て呼ぶか？シルフィス？ シィシス？」

「リリの好きな方かい」

「どちらも好きだわ」

「じゃあ、シィシスって呼んでくれ」

「いいの?」

「ああ、これから一生、僕をシィシスって呼んでいいのは、リリだけだ」

「貴方に彼女が出来ても?」

「ああ、妻が出来ても、子供が出来ても」

「分かった…」

リリは、強いて、あの花に込められたメッセーシの中身を聞かなかつた。シルフィスも、特に言わなかつた。

言わなくても、何となく分かる事って、ある。

リリやはその花が好きだつた。いつも欲しがつては、シルフィスが岩地を登って採つて来た。

リリヤがこっそりこの花を摘みに行ったのは、へもう自分独りでも採りに行けるのよ、だから安心して、と、兄に伝えたかつたのだ。

ウスユキソウ…厳しい荒れ地の斜面にしか咲かない、小さい可憐な花。だがその見かけと裏腹に、この花は、驚く程の生命力を持つている。全身の綿毛から空気中の水分を吸い込んで、乾いた岩地に、強く咲くのだ。

蒼の里の、平穏な朝。

居住区の路地裏を駆け抜ける、ウサギ頭のピルカ。メイんストリートに踊り出て、執務室前のデッキで干し物をしている少年に向かって叫ぶ。

「ね! うちのお姉ちゃんたち、見なかつた?」

「洗濯場の方へ行つたけれど、だいぶん前だつたかな」

「洗濯場は見たわ、ああ、もお、時間がないのに」

「どうしたの?」

「絹のリボンを貸して貰う約束をしていたの」

「今しているリボンだつて、いいじゃない」

「ダメよつ、今日の耳飾りにはあのリボンでないと! せつかく久しぶりにハイムダルに会うのに」

「なにいい?! 聞いていないぞっ!」

執務室の入り口を跳ね上げて、ホルスが飛び出して来た。

「今言つたわ、じゃあねつ、お父様っ」

ウサギ娘は、ほんとうに脱兎の如く、馬繋ぎ場へ駆け降りて行った。

「まったく…」

腕組みをして鼻から息を吐くホルズに、少年は、肩を竦めて

話し掛けた。

「女の子って、心底、分からないです」

「そうか？」

「先日ここで話すのを聞いて、同い年なのに、揚げ団子の中身の事しか考えていない僕との差をヒシヒシと感じて、落ち込んでいたのに、今日はリボンが最重要事項なんだから」

「あ？ あれか？ 後でナーガに聞いたけれど…あれな、おおむね、受け売りだぞ」

「マジですか！」

「うちの女性陣が、揚げ団子の館を包みながら、いっつも、わいのわいのと話しているような事だ。まあ…女性には女性の哲学があり、彼女たちなりに継承している物があるんだな」

「はああ…」

「リボンだって哲学の一部だ。分かるうとするな、無理だ」

「…はい…」

ウサギ娘と入れ違いに、坂下からユウジーンが登って来た。

「空でヘイムダルと行き合いました。ピルカとデートだって。なんやかんや言って、風波(かざな)の連中、蒼の里の女の子たちと、上手くやっているみたいですね」

「今まで交流のなかった所と仲良くなるのは、まあ、良い事で

はあるがな」

「竜の力が使える上に、奴ら、すべからく紳士で、北方系のイケメンだ。ぐまぐましていたら、里の女の子、みんな持つていかれちゃうぞ」

余裕をかましたユウジーンの台詞に、ホルズはふふんと鼻で笑った。

「リリが帰って来るまで、飯も喉を通らなかつた癖に」

「何言ってますか。眼中じゃないですよ、あんな女々しいシスコン野郎」

「呼んだか？」

後ろからのいきなりの声に、ユウジーンは飛び上がった。

振り替えると、風波のシルフィスが、眉間に縦線を入れて、突っ立っていた。

「シシス、ユウジーンは、女々しいシスコンって言ったのよ。貴方の名前ではないわ」

リリが後ろから顔を出した。

「そうか、聞き間違えた、すまない」

「な、なんでお前がここにいるんだ」

「蒼の長殿にお招き頂いたのだ。いけないか？」

「あれっ？ 今日だったっけ」

ホルズが頓狂な声を出し、室内に戻って、書類の束を繰りながら出て来た。

「ああ、すまんすまん、日付の行き違いがあったようだ」

「何なんです？ ホルズ様」

「こいつ、しばらく、蒼の里預かりになるから」

「な・なんだってええ!!」

「リリの使う術の数々に、興味を持った。蒼の長殿に願ひ出ると、この里で学ぶ許しをくださったのだ」

「えっ、はっ？」

「ところが、今、修練所の寮に行ってみたら、話が行っていないかったみたいで、空き部屋が無かったのよ」

リリが上目でホルズを睨んだ。

「うわっ、そいつはすまん、困ったな」

「僕は何処でも構わない。干し草小屋でも、長殿の自宅でリリと同居でも、ぜんぜん平気だ。地上に落ちた半分的林檎どうしだ。何の問題もない」

「おい待て！ この野郎！」

「おっそっだ！」

ホルズが、拳をボンと打った。

「コウジーン、お前んち、ベッドが二つ、余分にあったよな」

「!!」

「レンとカノンが使っていたベッドね。そうね、いい考えだわ」

「ちよ、ちよっと…」

「宜しく先輩」

何やかやと賑やかな面々を尻目に、見習いの少年は、聞こえない振りをしてながら、干し物に勤しんでいた。こんな、暖かて安心出来る場所が、これからもずっとあって欲しいと、心から願ひながら。

くおしまいく





ほくらほ

地上におちて
半分に割れた
りんごなんだ♡



売れ残ったら

もらってやるぞ



ほくかりりを

さらって帰ったって
いいんだ。



あたし
何故か

女子に
嫌われる
のよね……

たんとを
わかる
けどな

ノスリ

ホルガ